

■ 今月のメッセージ(平成2010年4月)

日本銀行富山事務所長

水上 誠一

昨年、ギリシャの財政危機が露呈して以来、金融危機対応の副産物として、各国財政の持続性問題がクローズアップされてきました。

ギリシャでは、金融危機にも拘わらず公務員給与の引き上げが行われたり、年金の支給額が現役時代平均給与の9割だったり、同情できないところがありますが、他のEU諸国としては、例えばフランスで7兆円、ドイツで4兆円という多額のギリシャ債券を保有していることもあり、国内世論を気にしながらも、何とか援助しようと躍起になっています。

こうした状況を揶揄し、問題のある諸国を指して“PIGS”とか“PIIGS”などといったちょっと酷い言い方が流布していますが、最近では、更に新バージョンとして、“STUPID”というそうです。これは、スペイン／トルコ／U. K. (英国)／ポルトガル／イタリア／ドバイの頭文字です。「豚」から「馬鹿な」では立つ瀬がありませんね。

ところで、皆さん、これを笑っている場合ではありません。IMFが今年の1月に、ある国の「財政の持続性や政治的な不確実性に対する懸念 (Concerns over sustainability and political uncertainties)」を表明したのですが、その「ある国」とは、“STUPID”の一員である英国(U. K.) プラス日本なのですから。

こうなると、“STUPID”に Japan を加えようということになるかもしれません。金融市場参加者の間では、「第二のギリシャはどこか」という話題で持ち切りなのです。縁起でもないことですが、試しに“STUPID”に J を加えて並び替えてみると、“JUST DIP”となりました。

これで思い出したのが、東京のホテルなどにある「チョコレート・ファウンテン」という、あふれ出るチョコレートにフルーツやビスケットなどをちょっと漬けて食べるという機械です。実は、あの機械の名前が“JUST DIP IT!” (ちょっと漬けてみて!) なんです。

となると、“JUST DIP”を意識すると、「破綻経済は蜜の味」なんてことになるのでしょうか。思えば、アジアやロシアの通貨危機も、脆弱な財政と過大評価されていた通貨をターゲットに巨大マネーが襲いかかったものでした。現時点で、日本は、①保有者が殆ど国内居住者、②多額の対外債権を保有、③貯蓄に支えられた経常黒字、などで、国債の大量発行にも拘わらず長期金利の上昇を免れています。不況や高齢化により貯蓄率が下がり続けている状況では、先行きは楽観できません。

今後、日本としては、当面国債の発行は止められませんが、是非市場の信認を得られる財政再建策を世界に示し、「ギリシャとは違う」ところを見せていかねばならないのです。